堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

日置橋をめぐる二人の功績　堀弥九郎と森村宜民

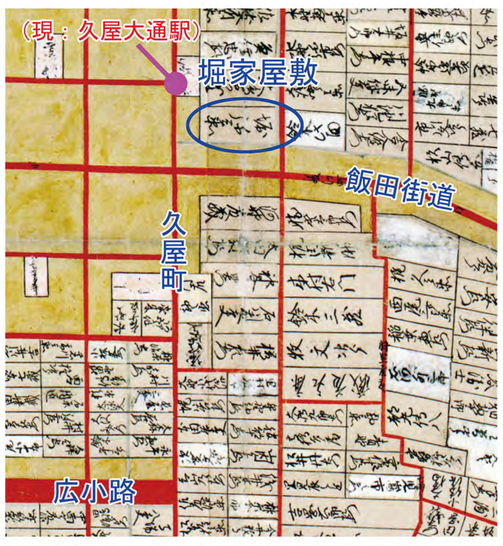
堀 弥九郎　日置橋の南北に植えた桃と桜が名所に

堀弥九郎は尾張藩士で、普請奉行をしていた文化年間（1804～18）に、日置橋の南北に数百株の桃と桜の苗木を植えた。成長すると名古屋きっての花見の名所となり、春にはたくさんの人が花見を楽しみ、茶屋や花見舟もでる賑わいとなった。

上：舟の上が堀彌九郎

辣腕の行政マンで家禄 200 石から 600 石取りへ

弥九郎は安永 6 年（1777）御右筆部屋下書見習として初めて出仕した。天明 3 年（1783）に御右筆、6 年に勘定奉行並となった。天明 7 年父の死亡により家督（200 石）を相続し、その年、奥御番兼御側御右筆に任ぜられている。



「名古屋御城下之図」明和・安永年間（1764～81）に付加

その後いくつかの職を経て、文化 3 年（1806）普請奉行になり、日置橋の南北に桃と桜の苗木を植えた。また天白川の浚渫などを行い流れを良くしている。

文化 12 年に熱田奉行兼御船奉行に配置替えとなった。白鳥の御船蔵に収蔵されている藩船の造りかえや修繕、熱田湊の工事、船番所の業務などについて、従来の慣習を改めさせ、それにより藩の経費が大幅に節減された。

上司からの評価は高く、家禄は 200 石であったが、足高（たしだか）（役職加算）が付いて 600 石となり、何度も白銀や時服を褒美として下賜されている。

文政 8 年（1825）に引退し、10 年に亡くなった。

下：花見に繰り出した城下の人たち　左端に日置橋　（桜見与春之日置より）

部下や同僚から見た人柄は?

普請奉行の時に部下だった奥村徳義は、『松濤掉筆』に次のように書いている。

> 剛直な人柄で経費節減には大きな功績を挙げた。しかし慈悲心の薄い人で、普請奉行の時に百姓が堤防に稲を干す稲架（はざ）を作るのを禁止した。困り果てた百姓が哀願しても「自分は堤防を守る役目。百姓の救済は勘定奉行の役目」と言って取り合わなかったことがある。何事につけ難儀した人々が多かった。亡くなった時に、それまで勤務した部署へ連絡したが、葬式に来た人はいなかった。

「慈悲心の薄い人」と部下の奥村に評された堀弥九郎。自らが普請奉行として実現し花見の名所となった堀川の花盛を目のあたりにして、何と思ったことだろう。

森村宜民（よしたみ）　擬宝珠に刻む人々への思い

森村宜民（森邨大朴）は尾張藩士で、学識に優れ藩校明倫堂の助教や愛知県中学校の教官を務めるなど、教育分野で功績を残した漢学者である。

日置橋南西の親柱には森村宜民の撰文を刻んだ擬宝珠（ぎぼし）が付いている。明治 14 年（1881）に日置橋の架け替えが行われた。この時に資金を提供した人々の名前と共に「百折一道達三重縣　寶珠之炎（こう）萬世不變　森邨宜民撰」と人々の志をたたえる文が彫られた。橋は昭和 13 年に改築されたが、明治の親柱は再利用され、今も現地に建って日置橋に寄せられた想いを伝えている。

森村宜稲筆『森邨大朴先生』

上：日置橋南西の親柱擬宝珠に刻まれている撰文
右：日置橋北西の親柱

藩校明倫堂の漢学一等助教

安政 2 年（1855）に御馬廻役として初めて出仕した。働きが認められ 7 年後には格別の扱いで 30 俵の家禄が 50 俵に引き上げられている。元治元年（1864）に藩校明倫堂の監生となり、3 年後に助教並、明治 2 年に漢学一等助教となったが、4 年に明倫堂が廃止され退職している。16 年に愛知県中学校（現：旭丘高校）の教官になり 5 年勤務し退職した。29 年に 75 歳で亡くなった。

青松葉事件で藩に異を唱え上書

朱子学をよくし、勤務の余暇に家塾を開いて若者の指導に力を注ぎ、易や漢詩にも通暁していた。酒を好み、謡曲も楽しんでいた。慶応 4 年（1868）に藩の佐幕派を粛正した青松葉事件では、書物奉行の冢田愨四郎（つかだかくしろう）の処刑に異を唱え上書した。藩よりお咎めがあると考え礼服を着用し 10 日間正座して待ったが、ついに不問にされたという。

子孫は大和絵画家として活躍

宜民の子宜稲（よしね）、孫の宜永（よしなが）は大和絵画家として明治から昭和にかけて大きな足跡を残し、今は宜高（よしたか）氏が活躍している。オアシス 21 の北にある旧宅は森村記念館となり、大和絵や茶道具を展示している。